

副詞 *needs* についての一考察

小 川 勉

0. 現代英語において、副詞 *needs* は助動詞 *must* と1つの有意味なまとまりをなしてふるまっていると考えられるデータが観察される。本稿では、これまでほとんど考察の対象になってこなかったこれら2つの語の連鎖がもつ諸特徴を明らかにするとともに、その歴史的発達を考察するための第1段階として、初期近代英語における副詞 *needs* と助動詞の連鎖のふるまいについて考察を加えることを目的とする。

1. 1. 現代英語における用法

現代英語において、*need* と形態が似ている語に *needs* があるが、この副詞のふるまいはかなり特徴的・限定的なものである。以下、辞書の記述を参考にする。*needs* の項目には次のような説明が与えられている。

(1) リーダーズ+プラス

adv [must と共に用いて] 《文》 ぜひとも (necessarily).

[OE (gen) < NEED]

(2) 新英和大辞典

adv. 《古》 どうしても、必ず、ぜひ.

今は *must* と共に次の成句で: *must needs do*

(3) 英和中辞典

《古》 [通例 *must* とともにその前後で用いて] ぜひとも …ねばならない

(4) 新グローバル英和辞典

【古・戯】 ぜひとも(necessarily)

〈普通, 次の成句で〉. must needs [needs must] do

(5) American Heritage Dictionary

ADVERB: Of necessity; necessarily: We must needs go.

(6) Merriam-Webster

Function: adverb

of necessity: necessarily <must needs be recognized>

Etymology: Middle English *nedes*, from Old English *nēdes*, from genitive of *nēd* need

Date: before 12th century

(7) Random House Unabridged Dictionary

adv.

of necessity; necessarily (usually prec. or fol. by *must*):

It must needs be so. It needs must be.

(8) Oxford English Dictionary

needs (n:dz), adv. Of necessity, necessarily.

以上の記述から、*needs* の特徴を次のようにまとめることができる。

- (9) (i) *needs* は副詞で、「ぜひとも～ねばならない」という「必要」の意味をもつ。
- (ii) *needs* は助動詞 *must* と共起し、*needs* は *must* に先行することも後続することもできる。
- (iii) *needs* は、古英語の時代から使われ、*nēd* (= need) の属格形から派生した。
- (iv) *needs* は、文語、古語または戯語として限定的に使われる。

次に具体的な用例を上で参照した辞書等から引用する。

(I a) *must needs* (～ねばならない)

- (10) You *must needs* catch a cold just before you take the exam.
- (11) This work *must needs* be done within the week.
- (12) An ass pricked *must needs* trot.

(I b) *needs must* (～ねばならない)

- (13) A man *needs must* (=cannot but) lie down when he sleeps.
- (14) *Needs must* when the devil drives.

《諺》悪魔に追いたてられればどうしてもせざるをえない、背に腹はかえられぬ。

(II) *must needs* (～に違いない)

- (15) It *must needs* be so.
- (16) You *must needs* [=needs must] do your duty.

(III) *must needs* (～すると言い張る)

- (17) He *must needs* come. ぜひ来ると強情を張ってきかない[きかなかった]。
- (18) Dick had a temperature, but he *must needs* go to school. ディックは熱があったが学校へ行くと言ってきかなかった。

これらの例から観察できることは、

- (19) (i) *must needs* の連鎖は、*must* の根源的意味 (=I)、認識論的意味 (=II)、および第3の意味 (=III)「～すると言い張る」をもつ。
- (ii) *needs must* の連鎖は、*must* の根源的意味 (=I) をもち、認識論的意味 (=II) や、第3の意味 (=III)「～すると言い張る」をもたない。

上記 (19 i) および (19 ii) の間に意味の平行性が見られないのは興味ある点である。

以下の 1. 2 節では *must : needs* の意味的分析を行い、1. 3 節ではその統語的分析を行う¹⁾。

1. 2. 意味的分析

1. 2. 1. Must と needs

Must は、次の例に見られるように根源の意味と認識論の意味をもつ。

根源の意味

- (20) You must have these figures checked.
- (21) You must change your socks if they get wet.

認識論の意味

- (22) You must be out of your mind to suggest such a thing.
- (23) There must be some mistake.

一方、副詞 *needs* は助動詞の意味分類を援用するならば、根源の意味のみをもち、認識論の意味はもたない。

1. 2. 2. Must : needs

1. 2. 1. で観察した *must* と *needs* がもつ意味が共起した場合、この連鎖がもつ根源の意味は、*must* のもつ意味の内、根源的部分 (= 意味素性) と *needs* がもつ意味の根源的な部分 (意味素性) が結合した上で、助動詞 *must* の意味を全体が引き継いだと考えることが出来る。意味的には、*must* がこの連鎖 *must : needs* の主要部と考えられ、構造的にも助動詞 *must* が述語副詞 *needs* よりも上位にある、すなわち先行する語順が無標であると考えられる。しかしながら、2つの語は同じ [+root] という意味素性をもっている

ので、*needs* が *must* に先行する語順も可能であると考えられる²⁾。

(24) *must* : *needs* ⇒ ***must*** : *needs*
 [+root] [+root] [+root]
 主要部

次に、*must needs* がもつ認識論的意味について考察する。*must* のもつ意味の内、認識論的部分 (=意味素性) は *needs* がもつ意味の根源的な部分 (=意味素性) と相容れないので、*must needs* がもつ認識論的意味は *needs* がもつ根源的な意味を無能力化することにより得られると考えられる。

(25) *must* *needs* ⇒ ***must*** *needs*
 [+epistemic] [+root] [+epistemic] [Ø]
 主要部

意味的には、助動詞 *must* がこの連鎖 *must needs* の主要部と考えられ、構造的にも助動詞 *must* が述語副詞 *needs* よりも上位にある、すなわち先行する語順が唯一の語順であると考えられる。

最後に、*must needs* がもつ第3の意味(「～すると言ひ張る」)について考察する。*must* のもつ意味の内、根源的部分 (=意味素性) と *needs* がもつ意味の根源的な部分 (=意味素性) が結合した上で、両者の意味が合成されたものと考えられる。

(26) *must* *needs* ⇒ *must* *needs*
 [+root] [+root] [+root] [+root]

意味的には、この連鎖 *must needs* の主要部は *must* でもなく、*needs* でもなく、2つの語の意味が融合して新たに第3の意味が派生したともものと考え

られ、意味的な主要部はないと考える³⁾。

この結果、構造的には助動詞 *must* が述語副詞 *needs* よりも上位にある、すなわち先行する語順が唯一の語順であると考えられる。

1.3. 統語的分析

前節では、*must* と *needs* の連鎖がもつ意味的側面から検討を加えたが、本節では、これら2つの語の連鎖の統語的特徴について検討する。

1.1節で検討したデータはすべて平叙文であるが、疑問文や否定文において助動詞の *must* が文頭に前置されたり、*must* と *needs* の間に否定辞 *not* が生じる可能性はあるのだろうか？

現代英語においては、*must* と *needs* が一続きの連鎖を構成するデータは観察されるが、この連鎖が分断される疑問文や否定文の例は観察されないので *must* と *needs* の連鎖の結合度は強いといえる。以下の例はすべて British National Corpus からの引用である。

- (27) Since you *needs must* drag me here, I should have liked to see this
Hotspur men talk so much about.;
- (28) Therefore reference *must needs* always be made to this history and
to this person.
- (29) Yet such triumphant tragedies *must needs* occur.
- (30) His Lordship *must needs* give consent.
- (31) If my complaints, 'Can she excuse', 'Now, oh now I *needs must*
part'
- (32) Even so, the snow there was calf-deep, so that George *needs must*
lift his legs at each step, making walking an effort.
- (33) They will be very serviceable, and *needs must* bring their tools
with them insofar as these be scant indeed on the island.

2. 歴史的英語における用法

2.1. Needs の歴史概観

副詞 *needs* が生起する環境について考察するための前段階として、副詞 *needs* の歴史的分布を概観する。

2.1.1. Must needs

OEDには、*must needs* の連鎖を含むデータが9例、ことわざとして4例が引用されている。全引用例13例はすべて、*must needs* の順で生じており、これは現代英語とは際立った違いを見せている。

Must needs の初出例は、

- (34) 13.. Guy Warw. (A.) 3668 So miche folk per was y-slawe ..He most nedes opon men go.

である。また、初期近代英語に限ってみると、

- (35) 1529 WOLSEY in *Four C. Eng. Lett.* (1880) 10 Thes thyngs consyderyd..must nedys make me yn agon

- (36) 1641 J. JACKSON *Ture Evang.* T. II. 129, I must needs begin with Ignatius.

がある。

2.1.2. Will/would needs

OEDには、次の定義がある。

- (37) *will or would needs*, implying determination or fixity of purpose.

Now Arch.

そして、*will/would needs* の連鎖を含むデータが 6 例引用されている。これは現代英語には観察されていない重要なデータである。引用例のうち 5 例は *will/would needs* の順で生じているが、残り 1 例は *needs will* の順で生じている。

Will needs の初出例は、

- (38) 1387 TREVISA Higden (Rolls) V. 143 And eif ee willep nedes
stryve, abydeth pe dome of God Almyety.

である。また、初期近代英語に限ってみると、

- (39) 1610 SHAKS. Temp. I. Ii. 108 He needes will be Absolute

がある。

2.2. 初期近代英語（シェークスピアの英語）における分布

本節では、シェークスピアの戯曲（37編）における *must : needs* と *will/wilt : needs* の全出現例を検討し、当該連鎖の意味論的、統語論的特徴について考察を行う。

2.2.1. Must と needs の意味論

先ず、意味論的特徴について考察する。*Must : needs* の全出現数は 86 であり、1. 2. 2. で検討したこの連鎖がもつ 3 つの意味に基づいて分類したのが表 1 である。表中の () の中の数は、*must* と *needs* の間に主語名詞句、*be* 動詞、副詞表現といった要素が介在している例の数を内数で表わしている。

表1の分類に基づき、以下のデータが観察される。

意味Ⅰ（根源的）

- (40) a. What fates impose, that men must needs abide; (3H6 4.3.58)
 b. therefore you must needs play Pyramus. (MND 1.2.88-89)
 c. You must needs yield your reason, Sir Andrew. (TN 3.2.4)
 d. Most honor'd Cleon, I must needs be gone. (PER 3.3.1)
- (41) a. That John may stand, then Arthur needs must fall: (JN 3.4.139)
 b. Which oft the ear of greatness needs must hear By smiling
 pick-thanks and base news mongers, (1H4 3.2.24-25)
 c. He needs must see himself. (ANT 5.1.35)
 d. And yet I needs must curse. (TEM 2.2.4)

意味Ⅱ（認識論的）

- (42) a. Your vild intent must needs seem horrible. (JN 4.1.95)
 b. Which makes me think that this Antonio, Being the bosom
 lover of my lord, Must needs be like my lord. (MV 3.4.16-18)
 c. The wars hath so kept you under that you must needs be born
 under Mars. (AWW 1.1.195-196)
 d. but in the extremity of the one, it must needs be. (WT 5.2.18-19)
- (43) a. His passion is so ripe, it needs must breake. (JN 4.2.79)
 b. Pray to the gods to intermit the plague That needs must light
 on this ingratitude. (JC 1.1.54-55)
 c. This needs must be a practise. (MM 5.1.122)
 d. But for thee, fellow, Who needs must know of her departure,
 and Dost seem so ignorant, we'll enforce it from thee By a
 sharpe torture. (CYM 4.3.9-12)

意味Ⅲ（～すると言い張る）

(44) a. Must he needs trouble me in 't--hem!--' bove all others? (TIM
3.3.1)

b. Must thou needs Stand for a villain in thine own work?
(5.1.37-38)

表1における各連鎖の分布について考察すると

- ① *must needs* の語順をとるものと *needs must* の語順をとるものは、65例と21例でおよそ3対1の割合で出現している。
- ② *must : needs* が根源的の意味をもつ場合、認識論的の意味をもつ場合、そして第3の意味（～すると言い張る）をとるものは、それぞれ63例、21例、2例である。根源的の意味と認識論的の意味はおよそ3対1の割合で出現しており、根源的の意味が相対的に強いと考えられる。
- ③ *must needs* の語順をとる連鎖は、意味Ⅰ（根源的）、意味Ⅱ（認識論的）、意味Ⅲ（～すると言い張る）すべてをもつ。一方、*needs must* の語順をとる連鎖は、意味Ⅰ（根源的）とⅡ（認識論的）のみをもち、意味Ⅲをもたない。この点は注目すべき違いである。さらに、現代英語と比較すると（(19 ii) を参照）、初期近代英語では、*needs must* の連鎖が意味Ⅱ（認識論的）をまだ保持していた。
- ④ 意味Ⅲ（～すると言い張る）をもつ例は、*Timon of Athens* (1607-1608) のみである。この意味は、*Timon and Athens* にのみ現れ、*must needs* という語順の場合しかとらないという点で興味あるデータである。

現代英語に出現するまでの歴史的過程を検証することが次の段階として必要であるが、本稿は現代英語と歴史的英語との橋渡しをするためのパイロット的位置づけであるので、今後の課題を指摘するにとどめる。

2.2.2. Must と needs の統語論

次に、統語論的特徴について考察する。*Must needs* の順で生起する連鎖は、大部分が1つの構成素を為しているが、以下の6例は助動詞 *must* と *needs* の間に主語名詞句、*be* 動詞、副詞表現のいずれかが介在しており興味深いデータである。

これらの例は X *must needs* という語順をとる連鎖において、*must* が *needs* に先行する位置から、疑問文を形成するためや文体上の要請から、介在する要素の左側に前置されたものである((46a)を除く)。

意味 I

- (45) a. Then *must thou needs* find out new heaven, new earth.
(ANT 1.1.17)
b. *Must he needs* die? (MM 2.2.48)

意味 II

- (46) a. There *must be needs* a like proportion Of lineaments, of manners, and of spirit; (MV 3.4.14-15)
b. and thou *must therefore needs* prove a good soldier-breeder.
(H5 5.2.205-206)

意味 III

- (47) a. *Must he needs* trouble me in 't--hem!--'bove all others?
(=44) (TIM 3.3.1)
b. *Must thou needs* Stand for a villain in thine own work? (= 44)
(TIM 5.1.37-38)

意味論と総合して考察すると、意味 I (根源的) と意味 III (～すると言い張る) は、助動詞 *must* と副詞 *needs* の間に主語名詞句が介在する場合に生じ、

意味Ⅱ（認識論的）は、語以外の要素が介在する場合に生じるといえる。

2.2.2. Will/Wilt と *needs*

まずこの連鎖の分布について考察すると、*will needs* の語順をとるものと *needs will* の語順をとるものは、それぞれ11例と2例であることから、*will needs* の語順が無標であると考えられる⁴⁾。

- (48) a. here's Mistress Page at the door, sweating and blowing, and
looking wildly, and would needs speak with you presently. (WIV
3.3.85-88)
- b. Dost thou so hunger for mine empty chair That thou wilt needs
invest thee with my honors Before thy hour be ripe? (2H4
4.5.94-96)
- c. Or if thou wilt needs marry, marry a fool, (HAM 3.1.136-137)
- d. He was a fool—For he would needs be virtuous. (H8 2.1.131-132)
- (49) a. My Lord Protector needs will have it so. (R3 3.1.141)
- b. he needs will be Absolute Milan— (TEM 1.2.108-109)

will needs の順で生起する連鎖は、ほとんどが1つの構成素を為しているが、以下の2例は助動詞 *will* と *needs* の間に主語名詞句 (*you* または *thou*) が介在しており興味深いデータである。

- (50) a. Will you needs be hang'd with your pardons about your necks?
(2H6 4.8.22-23)
- b. Wilt thou needs be a beggar? (AWW 1.3.20)

3. 結 論

本論文は、副詞 *needs* のふるまいを助動詞 *must* および *will* との共起関係という点から意味論的、統語論的分析をしたものである。一連の分析を通して明らかにした点は、まず、*must* と *needs* の連鎖が結合する場合、意味論的には両者が持つ意味素性の照合という操作が行われ、その連鎖の意味が決定されることである。また、統語論的には、助動詞 *must* が副詞 *needs* に先行する語順が無標と考えられるが、根源的意味 (I) をとる場合は有標の *needs* が *must* に先行する語順も許されることである。

次に、初期近代英語においては、*must needs* の語順をとる連鎖は、根源的、認識論的および第3の意味すべてをもつものに対し、*needs must* の語順をとる連鎖は、根源的、認識論的意味のみをもち、第3の意味をもたない。さらに、現代英語では観察されない認識論的意味を初期近代英語ではまだ保持していた点を明らかにした。さらに、助動詞 *must* と副詞 *needs* との結束度は強いが、この2つの語の間に主語名詞句、*be* 動詞、副詞表現が介在する例も散見されることも明らかにした。

最後に、初期近代英語においては、副詞 *needs* が助動詞 *will* と共起する場合は数は少ないが観察されること、そして、それらはすべて *will needs* の語順をとり、*will* と *needs* の間に主語名詞句が介在する場合も2例観察されることを明らかにした。

注

- 1) *must : needs* の表記は、*must* と *needs* が共起すること、そしてその左右の順序は未指定であることを意味する。
- 2) 根源的要素と認識論的要素の語順については、ここで取り上げている *must* と *needs* 以外の助動詞や述語副詞を対象にした広範な分析が必要であるので、稿を改めて検討したい。

- 3) この融合による意味の派生のメカニズムについては重要な問題であるが、本稿の目的を超えるものであるので、その可能性を指摘するにとどめる。
- 4) 分析をしたデータには、*will/wilt* の他に *would* をとるものが2例あるが、議論にかかわりのない場合は、*will* の変化形をすべて *will* で代表させる。

テキスト

G. Blakemore Evans (textual editor) (1974) *The Riverside Shakespeare*. Boston: Houghton Mifflin.

参考文献

- 荒木一雄・中尾祐治 (1980) 『シェークスピアの発音と文法』. 東京: 荒武出版.
- 荒木一雄・宇賀治正朋 (1984) 『英語史ⅢA』. 東京: 大修館.
- Blake, N. F. (2002) *A Grammar of Shakespeare's Language*. New York: Palgrave.
- Jespersen, O. (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part III Syntax*. London: George Allen & Unwin.
- 前島儀一郎 (1977) 『シェークスピア・聖書の語法』. 東京: 研究社.
- 小野 捷・伊藤弘之 (1993) 『近代英語の発達』. 東京: 英潮社.
- Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality*, 2nd ed. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvick (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
- 宇賀治正朋 (2000) 『英語の歴史』, 東京: 開拓社.
- Warner, A. R. (1993) *English Auxiliaries: Structure and History*. Cambridge, England: Cambridge University Press.

辞 書

リーダーズ英和辞典 (第2版) + プラス、研究社
新英和大辞典 第6版、研究社
英和中辞典 第7版、研究社
新グローバル英和辞典 第2版、三省堂
英辞郎 on the WEB

American Heritage Dictionary, Fourth Edition. (2000)

Merriam-Webster Online Dictionary (2005)

Random House Unabridged Dictionary (1997)